

# 肺炎



理事長・院長

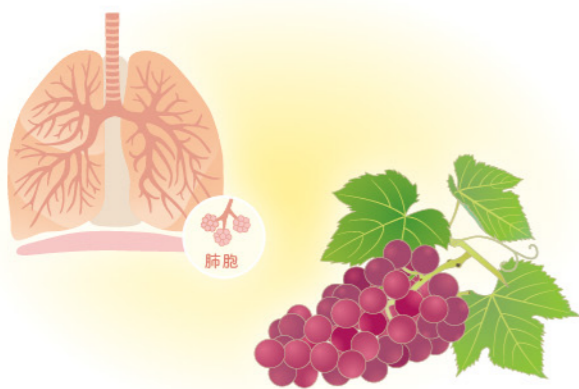
木原 明子



肺炎は、むかしから、広く一般に、聞き慣れた病名ですが、一口に肺炎といっても、様々な肺炎があります。いろいろな見かた、分類のしかたによって、肺炎を少しわかりやすく説明できれば、と思います。

肺という臓器、肺という場所、に炎症がおきるので、肺炎、と呼びます。

肺をさらに、構造的に分類してみます。肺は左右にひとつずつあり、肺をブドウの房にたとえると、左右にブドウの房がひとつずつある構造です。肺の肺胞（ブドウの実の部分：肺の実質ともいわれる）の中に炎症がおこる場合と、肺胞の周囲（肺胞の



まわりで、肺の間質ともいわれる）に炎症がおこる場合、両方に起こる場合がありますが、みな肺炎とよびますが、肺胞の周囲（ブドウの皮の部分）に炎症がおこる肺炎は、間質性肺炎と呼びます。

次に別の見かた、肺炎の起こり方により分類すると、なんらかの微生物などが肺に侵入しておこる感染症としての肺炎、アレルギーによる肺炎、免疫の異常による肺炎、誤嚥による肺炎、その他、などに分けられます。

まず、感染症としての肺炎をみると、病気の原因となる微生物などの種類で、分類をします。

細菌によるのか、ウイルスによるのか、それ以外の微生物などによるのか、です。

細菌によるときは、細菌性肺炎といわれます。細菌にも数かぎりなくありますが、たとえば肺炎球菌性肺炎、ブドウ球菌性肺炎、緑膿菌性肺炎などがあります。

ウイルスが原因の場合、ウイルス性肺炎とよび、その例としてはインフルエンザウイルス肺炎、麻疹

ウイルス肺炎、新型コロナウイルス肺炎、などです。

その他の微生物などとしては、マイコプラズマ肺炎、などがあります。

ここで、感染症としての肺炎について、その予防や治療についてみてみますと、予防は、一般的には、清潔な環境、体力をたもつ、ワクチンの接種などが、重要です。

そして、治療は、抗生物質、抗ウイルス薬などを使用します。

細菌性肺炎の場合では、肺炎球菌については、肺炎球菌ワクチンがあり、ワクチンを打っておくことで予防になります。

また、細菌性肺炎の治療には、抗生物質を使います。

ウイルス感染症では、ウイルスそのものによる肺炎もあれば、ウイルスに感染して体力が低下し、その結果、細菌による肺炎を合併する場合もあります。まずウイルス感染症の予防が大切で、ワクチンの接種は予防に役立ちます。インフルエンザワクチンもその一つです。

では、感染症ではない肺炎について、お話ししたいと思います。そのなかでよく知られているのが、誤嚥性肺炎です。

食べ物を飲み込む、飲み物を飲み込む、自分の唾液を飲み込む、といった機能が低下するために、本来は口からのど、食道を通過して、胃へ腸へ、とすすんでいくはずの食物などが、食道



の入り口でとどまってしまったり、あやまって、気管へ肺へ、と侵入してしまったりして、肺に炎症をおこす肺炎です。

病気や加齢によって、飲み込む機能が低下した場合、誤嚥性肺炎をおこしやすくなってしまいます。

予防に大切なのは、飲み込む機能を低下させないこと、自分の機能に見合った食事をとることです。

飲み込む機能を低下させないために、口や顔、顎、舌、などの筋肉の維持やリハビリを、日頃から意識しておこなうことが大切です。

歯の状態をよくしておくことも大切です。必要な義歯は入れたり、合うように調整したりして、口・顎の構造をしっかりさせることは、誤嚥の予防に重要です。

また口の中を清潔にして、口の中の細菌をできるだけ減らしておくことです。

最後に、新型コロナウイルス感染症について少しお話しします。新型コロナウイルス感染症は肺炎を合併しやすく、肺炎になると血液中の酸素飽和度が低下し、酸素吸入が必要になったり、重症化すると人工呼吸器による治療が必要となり、回復までにかなり時間を要します。

治療薬は様々な治療経験が積み重ねられつつあり、また予防にはワクチンの接種が徐々に開始されています。

しかし一番大切なことは、私たち個人の、新型コロナウイルスに対する意識です。地域のウイルスの量を減らすことが大切なのです。目標は、自分がかからないこと、そして人にうつさないことです。そして、すぐにできる対策は、手洗い、マスク、密をさける、不要不急の外出をしない、気を緩めない、ということです。どうぞよろしくお願いたします。